

第6回ほっかいどう元気なふるさとづくり交流大会

第3分科会（若者）

- < 事例発表者 > 村下 知宏 氏（株式会社 ユートライン 代表取締役）
< ファシリテーター > 原 文宏 氏（一般社団法人 北海道開発技術センター
地域政策研究所 所長）
< アドバイザー > 鈴木 聡士 氏（北海学園大学 工学部 生命工学科 教授）
< 日時 > 令和2年1月31日（金） 9:00 ~ 10:50
< 会場 > TKP 札幌駅カンファレンスセンター 2階 カンファレンスルーム21

事例発表

朝早い時間からのスタートで、まだ目が覚めていない方もいると思いますが、よろしくお願いします。

今回、若者分科会で事例発表する機会をいただきましたが、「そもそも若者というテーマで何を話せばいいんだろう」という部分と、私、今32歳ですけど、「32歳は若者に入るのかな」という部分があり、「何を話せばいいんだろう」と悩みながらですけど発表させていただきます。自己紹介の部分で「なぜ地域に興味を持ったのか」という事についてお話させていただくので、私の世代と参加者に多い平成生まれの世代の方と、どういう形で地域づくりに興味を持ったのかといったお話も聞いていければ面白いかなと思います。それから事業と活動概要と、実際の活動をしていく中での課題、展望をお話させてもらえればと思っています。最初に断っておきますが、私が今やっている取組は決して成功事例ではなく、まだ、もがきながら挑戦し続けている最中ですので、私にもアドバイスをいただければ大変ありがたいと思っています。よろしくお願いします。

まず、自己紹介ですが、村下知宏といいます。今は「株式会社ユートライン」という1人会社で活動しています。また「NPO法人カエロ」を昨年に立ち上げて、そちらの代表もしています。1987年、昭和62年生まれで、いわゆる「ゆとり世代」です。もともとは北海道浦河町の出身で、高校卒業後、大学進学時に上京し、大学卒業後、人口約5千人の東京都奥多摩町に移り住み、その後、京都に移り住んで、現在、浦河町に住んでいます。皆さんもご存じかと思いますが、浦河町は、えりも町の手前にある人口1万2,000人の町です。観光乗馬で外から来られている方も結構多く、もともと地域おこし協力隊のOBの方が乗馬施設と連携して、短期集中乗馬実践プログラムを企画していて、去年は「1年間で、本州か



ら 10 回来ています」というお客様もいるなど、馬のファンが多く訪れる町です。

ところで、皆さんは、「地方へ移住」という言葉から連想するのは、どんなイメージでしょうか。「定年後」や「都落ち」といったスロー・ネガティブのイメージですか。あるいは「若者」や「挑戦」といったチャレンジ・ポジティブといったイメージでしょうか。今回は比較的若い方のご参加が多いですが、ネガティブワードの「都落ち」などをイメージする人はいますか。私が浦河町に帰ってきた時、「大学で東京まで行って、何で浦河町に帰ってきたの」と親世代の方々にかなり言われました。あとは「NPO」といった言葉から連想するのは「ボランティア」のような無償奉仕、もしくは「ソーシャルビジネス」のような事業といったイメージのどちらでしょうか。世代や関わっている分野で、言葉のイメージが違ってくると思いますが、この分科会では、「どんな背景」で「なぜ地域に」といったことについて、今お話した世代間の違いの話も含めて、みなさんとお話をできたらと思っています。

それでは改めて私自身の背景について、お話しします。私は浦河町出身で、浦河高校では、幼稚園、小学校、中学校まで一緒の人もいて、嫌な思いはないですけど、「さすがに大学まで一緒に行かなくていいよね」「とりあえず町外に出たい」「浦河じゃないところに行きたい」ということで、東京に出ました。

私が大学生だった 2009 年 4 月に発行された週刊ダイヤモンドは「社会企業家、全仕事、あなたにもできる世直しビジネス」という特集でした。ダイヤモンドの表紙になることからわかるように「NPO」「ソーシャルビジネス」「コミュニティビジネス」といった言葉が注目を浴び始めた時でした。また、私が就職活動をするときは、ちょうどリーマンショックの影響があり、一学年上の先輩達では「内定取り消し」があった時代です。経済発展に行き詰まり感があり、大手有名企業ではなく、NPO や社会起業家が脚光を浴び始めている時代でした。そんな時期に大学生活を送ったので、単純に社会起業家や地域ビジネスは格好良いとミーハーに思っていました。

そういった背景もあり、私自身が、浦河という田舎町出身だったので、地域でソーシャルビジネスができないかなと思い、大学卒業後、仲間 2 人と東京都奥多摩町に移住し、家賃 5,000 円の下宿で、アルバイトもしながらパソコン教室等の小さな企画をつくり取り組んでいました。当時、地元のローカル新聞に取材を受けたところ、「若者 3 人が転入」と、別に何かをしたわけでもなく、転入ただけで一面に載りました。「地域づくり」とか「地域おこし協力隊」などの言葉がまだ世間には出ていなかったのも、「町に移住してくる若者がいるんだ」「地域づくりを手がけようとする何か変な人があるんだ」みたいな感じで色々目にかけていただきました。

そんな感じでアルバイトをしながら、勝手に「地域おこし協力隊」みたいな活動をしていましたが、当然食べてはいけません。それを見かねた学生時代にお世話になっていた地域づくりのコンサルティング会社の方に、「うちの会社に来ないか」と誘われ、1 年間、かばん持ちみたいな感じで働かせていただきました。鳥取や島根、広島、愛媛などの人材活用のサポートや、地域おこし協力隊の農林水産省バージョン「田舎で働き隊」の募集や地域受け入

れ団体のサポートなどをしていました。

任期が終わった 2012 年に浦河町に U ターンしました。前職で携わった「田舎で働き隊」という事業を、地元の民間の方々に「一緒にやりませんか」と話をして、受け入れ団体を作り、申請したところ採択となり、「これを一緒にやりましょう」ということで、「田舎で働き隊」の受け入れをしていました。その後、2013 年に「株式会社ユートライン」を立ち上げました。この会社は、行政と民間の中間組織という形でやっています。私自身はソーシャルビジネスやコミュニティビジネス等の芽吹き世代だったため、「地元で貢献したい」というよりは、「地域で何か挑戦してみたい」という軽い気持ちで田舎に来てしまったパターンです。どちらかというと、「地元でやる」というのは、親や家族もいて失敗できないですし、「少し嫌だな」みたいなこともありましたが、「地元で帰る」という意識よりは、浦河町を客観的に見て、いろいろな田舎を見た上で、「浦河町も楽しそう」と思ったので、U ターンしました。

さて、ここから本題の事例発表に入らせていただきます。何をやっているかということ、株式会社ユートラインでは、地域の団体や事業者の支援、組織の立ち上げ支援を行っています。また、地域おこし協力隊事業の中間支援組織として、人材の募集や活動のサポートをしています。

活動支援や組織立ち上げ支援ですが、地域でいろいろと活動していく中で「何か上手くいかない」「何かやりたいけど、どうやれば良いのかわからない」「役場や商工会議所に相談に行く感じでもない」といった案件が私のところへ来ています。例えば、これまでの形態では事業が続かないといった課題に対して、新たな組織をつくって、行政との連携の仲介などを行いました。他には、「体験型旅行のコーディネート組織を立ち上げたい」という相談を受け、何をやりたいのか聞きながら事業計画を立てることや、メンバー構成などの話を提案しながらサポートさせていただいています。こちらはまだ現在進行形で、相談者が「私達は何やりたいんだっけ」など、立ちどまるタイミングが出てきたりもしています。そのような課題についてのヒアリング、行政との連携、事業計画や企画の立案、組織体制づくりに関するアドバイスなどを行っています。

その他にも地域内の様々な事業者の新たな商品の開発や、団体・事業の立ち上げの際のサポートを行っています。もちろん、実際に企画を動かしたり、商品開発するのはご本人達ですが、その企画を作る上で、誰かに説明したり、何かしらのプレゼンテーションをするなど、伝わる企画としてまとめないといけない場面があるので、そういった時に「どういうふうにまとめたら良いか」「どういうふうな言葉にすれば良いか」などをサポートしています。自分達で自身の強みに気づいたり、PR したりすることはなかなかできないので、そういった部分で「こういうところ、すごいですよね」などの話をして、それを形や文章にすることもさせていただいています。

次に、地域おこし協力隊中間支援業務ですが、浦河町では、現在 3 名の地域おこし協力隊が活動しています。これまで 11 名の協力隊が着任していますが、協力隊の募集や活動の実

行支援をしています。役場の方はどうしても人事異動があり、連続性がない部分があるので、協力隊の任期 3 年の間に役場の方が途中で異動してしまうと、今まで積み上げてきたものが「ゼロ」に戻るとまでは言いませんが、温度感が違っていたり、その経緯を知らなかったりなどの部分があるので、中間支援という形で、隊員の募集や役場でできない継続的なアドバイス等の業務をしています。浦河町地域おこし協力隊の特徴としては、定型業務は基本的に一切ありません。ミッション型か、自己提案型があり、自己提案型の場合は「こんなことやりたい」というのを募集段階から書いてエントリーしていただいています。ミッション型の場合は、スポーツを通したまちづくり、小規模事業者のサポートなど、テーマと課題にもとづいて応募していただき、そのテーマに対するアプローチ方法等を相談しながら進めています。そのため「事務作業を何かしなければいけない」「役場のあれこれを毎日やる」などは基本的に一切ありません。「仕事は自分で作らないと発生しない」という、ある意味では楽ですが、ある意味ではすごくシビアな形で行っています。また任期中から稼ぐことを奨励していて、浦河町では、協力隊の任期終了後に職員として雇うといったその後の進路の保証をしていません。定型業務なしで自由な時間があるから、「任期中にきちんと仕事を作ってね」というような形にしています。そのため、事業化できるものは、行政でも委託事業化しています。きちんとお金を払う形で、協力隊期間は町にとって必要だけど、今すぐ収益化・事業化できない事業などを開発する猶予期間として、地域おこし協力隊の制度を活用するスタンスで行っています。

協力隊の活動を紹介しますと、山口このみさんという U ターンの隊員がいて、もともとデザイナーの方で、デザインや市街地活性化のイベント企画等を行っています。浜町通りと呼ばれている商店街があるのですが、そこを歩行者天国にしたイベントの開催や、浦河町のイベント情報の発信をしています。この方は、去年まで産休を取ってしまっていて、自身の経験を活かして、妊婦さんも駐車場の障害者枠に駐車することを周知するために、車と駐車場に貼るサインを作るなどしています。

もう 1 人は上野皓平さんという隊員がいて、去年、一般社団法人ゼロネクストワンという法人を立ち上げました。スポーツを通したまちづくりをしていて、スポーツイベントのプロデュースや合宿誘致、高齢者向けスポーツなどを行っています。上野さん自身は、もともとプロのフットサル選手として、上海のリーグでプレーしていました。ドリブルデザイナーを講師にお招きした子ども向けのサッカークリニックや、高齢者向けの運動教室、浦河町の自動車教習所をコースに用いたストライダー大会、さらにはパラスポーツに取り組んでいる障害者のお子さん達の合宿を、浦河町で行いました。

最後の 1 人は、今紹介した上野さんとは違う上野聡士さんと言う方が昨年着任して、子育て関係をテーマに、これからこういったアプローチで取り組んでいこうか考えているところです。

協力隊支援業務のコンセプトとしては、「行政と民間の翻訳」と「専門的なアドバイス」、
「完全伴走型支援」ということで一緒に事業キャリアを考え、つくるという形でやっています。

す。行政と民間で使う言語には違いがあります。その根底にはそれぞれが優先するものの違いがあるのだと思いますが、例えば民間は「利益」を重視しますが、行政は「公益」、民間は資本を「集中」的に投下しますが、行政は税金を「平等」に投入します。こういった言葉や考え方がわかっていないと、民間経験者のほとんどの協力隊は「なぜ、活動に支援してくれないのか」と不満が高まり、行政は行政で「それは平等性がないから無理なんだよ」と共感しているのに支援できないといった状況になります。このような場合に「こういう形でやったら、平等性を担保できませんか」といったアプローチや表現を変えて、協力体制をつくる「翻訳」的な役割をしています。

その他の個人的な活動としては、浦河リノベ部という任意団体で、空き店舗を改装しての活用や、東京大学の学生と知り合う機会があったので、浦河高校生を対象にした東大生に学ぶ受験勉強講座などもやっています。

果たしている役割としては、「地域を繋げる」ということで、行政と民間、民間同士の橋渡しや、「オフense」ではなくて「ディフェンス」となる事務局や調整などをやっています。

課題ですが、「コーディネーター食べていけない問題」と勝手に呼んでいるのですが、行政と民間を繋げるだけでは、商談になっているとか売り上げが発生しているとかではないケースが大半なので、それだけで食べていけないところが課題です。昨日の交流会でも、いろいろな方と名刺交換をしましたが、「こんなことやっています」と挨拶すると、「それ食べていけるの」と聞かれ、「なかなか厳しいですね」と話をしていました。それが、課題だと思っています。

今後は、「活動」から「事業」への移行フェイズをスムーズにする支援をしたいと思っています。例えば、協力隊の方が任期中にイベントの事務局をやっているとしても、任期が終わると、時間がとられて本業ができなくなるため、継続が難しくなるといった状況に陥ります。イベント参加者からお金を取れるような形にするとか、チケット制にするとか、「楽しい」や「熱中」を損なわないまま、持続発展する事業にする橋渡しをしていきたいと思っています。

それから、サポート基盤の確立をしていきたいというのがあります。市民活動の基盤整備やプレーヤーを増やすということをしていきたいです。その基盤整備で「NPO法人カエロ」というものを立ち上げまして、地域を動かす人を増やすということで、人材のマッチング、Uターンするキャリアの構築、地域づくりの担い手支援ということをしていきたいと思っています。

初めに皆さんのお手元にリーフレットをお配りしましたが、3月にU・Iターン促進のための冊子を発行しようと思っています。30歳以下は無料で、31歳以上から有料にする仕組みにしようと思っています。Uターンを考えるライフステージの変化が多い、30歳までは無料で配付し、例えば「そこで集めたデータに対して、こんな仕事ありますよ」などの案内もしつつ、少し面白さも取り入れたU30のフリー冊子という形で作っていかうということで、先ほどご紹介した協力隊の山口さんと連携して取り組んでおります。

駆け足のご紹介でしたが、なかなか最後の部分の「コーディネーター食べていけない問題」に関しては、皆さんからもご助言をいただければありがたいなと思っております。

意見交換

参加している地域おこし協力隊の今後の活動や方向性、また市町村職員から客観的に見た地域おこし協力隊について議論するとともに、仕事としての定着に向け、どのような課題があるのかについて意見交換が行われた。